



学部長ドボン！で寄付金獲得

東京大学 教育企画室 特任准教授 船守 美穂

career

Miho FUNAMORI ●



東京大学理学部卒業、同大学院地球惑星物理学専攻修士課程修了。三菱総合研究所、文部科学省大臣官房国際課等を経て、2005年から東京大学国際連携本部、評価支援室IR担当を経て現職。東京大学の国際化推進長期構想の策定、研究評価、教育課題の洗い出しなどに関わり、大学の学術マネジメントが専門。近年は、高等教育におけるデジタル化の進展を追う。

根裏部屋のような居心地の良い部屋だった。

学部長室でロエン学部長は“University College”について説明してくれた。“University College”という組織は、アメリカの大学に時々見かけるが、特別決まった定義はなく、大学によってその役割や機能は異なるのだそう。社会人学生の受け皿となっている場合もあるが、アリゾナ州立大学では、専攻を決めきれない学生が在籍する組織となっている。アリゾナ州立大学では、出来ることなら入学時点から専攻分野を定め、それぞれの専門学部在籍するように学生に指導しているが、決められない学生は“University College”に在籍する。オリエンテーションの科目を受講し、進路相談を受けたり、大学準備を図るためのリメディアル教育などを受けたりする。専攻分野を見定めるまで、学生を揺籃してくれる組織だ。

学部長室のミーティング机でこうした説明をしてくれていたが、自分の学部長机にある資料を取ろうと、そちらに向かおうとして、ロエン学部長はつまづいた。「いや～。先週末、ダンク・タンク（Dunk Tank）で足腰を打ってしまってね」と情けなさそうに、学部長は説明した。私が怪訝そ

11月初旬、アリゾナの灼熱の夏もようやく収まり、気温が20度程度になり過ごしやすくなった頃、フェニックス近郊にあるアリゾナ州立大学にいた。大学進学と卒業率の拡大という全米の課題に対して、オンライン教育等を通じて解決するということが最も先進的であるというこの大学を取材することが目的であった。しかし少しの隙間時間があったため、大学のホームページでみた“University College”というものが何か、インタビューしてみようと思立った。直前の申し入れであったが、アリゾナ州立大学の教養学部およびUniversity Collegeの学部長であるデュエーン・ロエンは快く面会に応じてくれた。

約束の時間に学部長室のある建物に向かうと、ロエン学部長は二階のテラスに出て待っていてくれた。「分からないと困るから、出ていたよ」と人の良さそうな笑顔で出迎えてくれた。思うのだが、教養学部長は世界共通、人に対して暖かい。人間形成という教養学部の性格がそうさせるのだろうか。学生の成長を暖かく見守る目が、学生以外の者にも向けられる。

ロエン学部長は廊下にいるスタッフに、病気の夫の容態を気遣う言葉などをかけながら、自分では足を引きずりつつ、学部長室に入っていった。アメリカ人にしては小柄な、初老の男性である。足腰にくる歳には見えなかったが、健康状態については人それぞれ事情があるのだらうと思ひ、敢えてそれは指摘せず、一緒に部屋に入った。外にはテラスがあり、斜めの天井からは日が入る、屋

うな顔をしていると、「君、ダンク・タンクを知らないのか？今全米で大ヒットなのだよ！」と急に嬉しそうな笑顔となって、学部長は言った。「ちょっと、ここに来なさい。ダンク・タンクを見せてあげるから」と学部長はパソコンに向かった。「こういうのは、百聞は一見にしかず。動きを見た方がいいからね」とYouTubeでダンク・タンクを検索した。”Dunk Tank”と入力すると、たくさん動画がヒットした。

映像を見ると、高い位置に設置された鳥かごのような円筒の檻（オリ）のなかに人が座っている。楽しいBGMが流れ、陽気な観客の応援の音が響くなか、観客の一人が檻の横に設置された的にボールを投げていく。3回投げて当たらないと、次の人の番だ。なかなか当たらない。檻のなかの人は軽口を叩きながら陽気そうである。ボールを投げる人がどんどん交代していったが、途中で自分の番になった人が意気揚々と檻のところまで行き、的を手で押した。

ドボン！檻のなかに座っている人の椅子が傾

き、檻の中の人は、檻の真下に設置されている円筒のプールにザブンと水しぶきを上げて落ちた。観客も、落ちた本人も、大はしゃぎである。大当たりの鐘も鳴った。檻の中の人が自分の席に再びよじ登ると、ボール投げがまた始まった。そのうち、ボールが的に当たると、檻の中の人は再びドボン！と水に落ち、会場は笑い声と歓声に包まれた。

ボールを投げるのは1ドル。的を手で押すのは10ドルである。アリゾナ州立大学はこの方法で週末に900ドルの募金を得たとロエン学部長は自慢げに話した。

それでも私はよく理解できなかった。こんな子供だましの遊びで、大の大人がたくさん集まって、この遊びに興じるというのは一体どういうことか？

ロエン学部長は笑いながら説明してくれた。「これは『教授を沈めよう！』というイベントで、全学の学部長が全員、檻の中の人になったんだ。教



図 アリゾナ州立大学における「ダンク・タンク」チャリティーの様子
(ボールを手に、仲間の学部長を溺れさせようとするロエン教養学部長)

職員や学生、地域の人々は日頃の恨みをここで晴らせるというわけさ。ふだん偉そうにしている上長を水に沈めるのは痛快に違いないさ(笑〜)。そんなわけで週末のイベントとしてこれを教養学部で企画してやったんだ。募金も集まったし、キャンパスや地域の方々との一体感も高まったよ。

なるほど。偉い人をコケにすることで、寄付金を獲得するのだ。大学だけでなく、企業や銀行の常務の方々や議員など、色々な偉い人を沈めるのに使われているようである。パーティーのイベントやナイトクラブなどでも使われ、ダンク・タンクのレンタルもある。さすが陽気な人達が考えることだ。しかし、偉い人達がこうして身を張って寄付金を獲得し、皆が楽しみながら、コミュニティの一体感も生まれるのであれば良いことではないか？日本の暑い夏にもぴったしの催しのように思う。

インターネットで“Fundraising”と“fun ideas”などで検索すると、たくさんのアイデアが出てくる。たとえば、「誰かから寄付があれば、その週は髭を剃らない」とし、執行部の中で誰の髭が一番長く伸びるかを競うとか、より安易にできる方法では、執行役員も参加する晩餐会への招待をするなど(参加費はチャリティーであることは初めから明確にしておく)。また偉い人の参加は特別に必要とはしないが、キャンパス内の数カ所を周り、誰が一番早くスタンプ等を集めるかを競うマラソン大会を企画したり、体力的により緩い方法としては、ゴムのアヒルを参加者が購入、自分の名前と電話番号を油性ペンでその背に書いてもらい、そのアヒルを川に放ち、下流のゴール地点に誰のが一番先に着くかを競い、一番の人は景品をもらえるなど。ネットで見ていたら、“100 Fund-

raising Ideas”などをリストアップしている大学も複数あった(たとえばJuniata College:<http://services.juniata.edu/osa/100FundraisingIdeas.html>)。

どうやら、寄付金集めは必ずしも教育・研究に関係がなくても良いようである。というより、「チャリティーのためにお楽しみ企画を用意しました！」という方が素直で、寄付金は集まるようである。

「日本は寄付の文化がない」と言われ続け、大学も(一応形としてはやり続けているが)なかば諦めモードで寄付金集めを行っている。しかし難しく考えすぎたのではないだろうか？学生のための奨学金、海外派遣、地球規模の課題解決、建物建設等の真っ当な理由で攻めるのではなく、楽しみのため、という理由をはじめから正面に掲げても良いのではないか？勿論、個人の方々から得る募金は集めてもたかが知れているだろうが、イベントの最後のハイライトとして、参加者の当選者発表や表彰式とともに、「今年企業等から得た寄付金のトップ3の発表」などがあれば、寄付をしてくれた企業等にとっても宣伝になるだろうし、寄付において競うといった雰囲気も生まれるかもしれない。そうしたことがなくても、社会のなかにおける大学の存在意義が問われる時代において、学内外の人々のあいだで一体感が生まれるだけでも、こうしたことを行う意義はあるだろう。

日本においてもクリエイティブな寄付金獲得の方法が生まれることを期待している。日本の東西でどうであろう。関西圏は笑いをとることで攻めるのだろうか？